

スペインにおける地域主義と都市景観保全

栗原尚子

都市景観保全をめぐる問題を、政治的、経済的、社会的コンテクストから、スペインを事例に報告したい。特に、東北部のバルセロナの事例を紹介する。

スペインにおける地域主義とは、地域 region への帰属意識を指す。スペインでは、国家 nation state よりも地域への帰属意識が強い。「スペインは8つの国から成り立っている」と言われるほどである。特に、カタロニヤ、バスク、ガルシアの3つの地域で、その傾向が特に強いといわれる。

バルセロナはカタロニヤに属するので、まず、カタロニヤの地域主義について述べたい。19世紀後半、中央集権という近代国家システムが確立する過程で、地域主義の先駆的な運動が高揚した。1930年代の市民戦争後、フランコ独裁体制下では、地域主義は抑圧された。この時期、都市景観をめぐることは、地域の事情を考慮しない建物が続々と造られた。1975年、フランコが死去、民主化が急速な勢いで進んだ。それに伴い、全国的に、地域主義の復活が始まった。1979年の連邦憲法の中で、自治州を創設するという形で、地域主義が実現した。地域主義が制度化されたのである。カタロニヤでも住民投票により、自治州が成立した。1975年以降、カタロニヤでは、社会のカタラン化と呼ばれる動きがある。公用語としてのカタラン語の使用が始まった。

都市景観では美的な保全、修復が図られ、地域の特徴を誇るものとして、再開発を含む都市再生が実施された。旧市街の外縁部に都市計画を施し、碁盤目状の都市空間が創出された。スペイン資本主義では、繊維工業の隆盛による近代化の中、産業資本の投資先が狭く、多くは不動産投資に回った。投資対象としては、まず、富を蓄えた中産階級の住宅地である。次に、芸術的な建造物に投資するようになった。前者の開発が面的であるのに対し、後者は点的である。カタロニヤのモダニズムというのは、芸術的な建造物である。代表は、A.ガウディの作品群である。なお、ガウディのパトロンはグリュエルという人物だが、やはり産業資本から輩出した人物である。

現在のバルセロナの都市空間の形成は、19世紀後半以降の、中産階級のための集合住宅地、また、カタラン・モデニズモと呼ばれる建造物が創り出している。1975年以降、再び勃興した地域主義の中で、歴史的な建造物を、まず保全・修復しようという活動が地域主義と結び付いて起こってくる。まず、個別の歴史的に意味のある建造物をリストアップすることから始まった。そこには、一連のガウディの建造物も入ってくる。リストアップ、保全、修復というプロセスである。なお、ガウディの有名な、そしてバルセロナで一番象徴的な聖家族教会は、保全・修復どこ

るか、建て初めて百年経っても出来上らず、完成には、あと百年かかるだろう。ともかく、保全・修復された歴史的な建造物は、バルセロナ市の公共的な利用に供される。

一方、住宅地の場合は、老朽化しているため再開発という形では、周囲の景観との調和、特に色彩での調和が重視される。外壁のみを残し、内部は現代的に利用できるように改装する。それにより周囲の建物との調和を図るという試みがなされている。この周囲との調和には、色彩が重視される。そして、超高層の建物は、景観の保全・修復の対象となっている範囲から外されるので、バルセロナの海側に広がる。

都市景観そのものが、文化遺産資本と呼べるのである。これが、やがて都市観光 urban

tourismと結び付く。年間約358万人、のべ869万人の観光客が、バルセロナを訪れる。観光客と住民との都市空間の共有が、文化的・歴史的活動を重要な観光資源に作り上げる。また、景観の保存修復に関して、ヨーロッパの場合、持続可能 sustainable という概念がよく用いられる。主に環境保全で使われることが多い概念だが、住宅地が再開発された場合、ジェントリフィケーションが起こらないようにする。このことについては、イタリアのポローニャの例が、宮本憲一氏などの研究（たとえば、宮本『都市経済論』、筑摩書房、1980）で知られている。

以上、マクロなレベルで、政治、経済、社会のコンテクストに基づき、話題提供した。

（お茶の水女子大学文教育学部）

Regionalization and Urban Landscape in Spain

KURIHARA Hisako (Ochanomizu University)

Key words: Regionalization, Urban landscape, Capital of cultural heritage, Balserona, Spain, Historical landscape